



大門小だより

11月号

令和元年10月30日

大門大好き いい仲間 進んで学ぼう 元気な子

横浜市立大門小学校

節目のおりの装い

校長 佐藤 峰子

私が日ごろ利用している書店の近くに、若い世代に人気のフォトスタジオがあります。10月に入って、小さい子を連れた親子に祖父母と思われる人たちが加わって、大勢でスタジオを訪れている光景を目にし、「七五三が近いんだなあ」と実感した次第です。11月15日のお祝いの前に、記念写真を撮っておこうということなのでしょう。

七五三の起源は、平安時代とされています。医療の発達していない時代は、「七歳までは神の子」という言葉があったほど子どもの死亡率は高く、無事に成長することを祈る様々な儀式が節目ごとに行われていました。三歳の男女の「髪置き」、五歳男子の「袴着」、七歳女子の「帯解き」の祝いは、江戸時代には武家や裕福な商人の間で行われていましたが、明治時代になってこれらをまとめて「七五三」と呼ぶようになり、次第に庶民に広がり定着したといわれています。いつの時代でも、子どもに「元気に育ってほしい」と願う親心は変わらないということです。

七五三に限らず、節目の祝いには、古来から伝わる「装い」があります。成人式の「装い」は、一時洋装が多い時代がありましたが、和服が復活し、大学等の卒業シーズンには、袴を着用した姿を街で多く見かけるようになりました。小学校の卒業式でも、袴を着用して式に臨む子どもが増えています。

私が卒業式に袴姿の子どもを見たのは、3校目の学校に着任したときでした。その学校では、保護者や祖父母の考えで、節目となる卒業式に大切にしてきた袴を着させたいという家庭があるということでした。かなり驚きましたが、そういう考えもあるのかと思いました。その後も多くの卒業生を出しましたが、袴の着用は多くありませんでした。ここ数年で、小学校の卒業式の「装い」は劇的に変わりました。本校も例外ではありません。小学校の卒業式が華美になってきたことで、地方自治体や学校によっては袴を禁止とするところも出てきています。私自身は、「装い」は自己の判断による、「禁止する」ということはそぐわないという考えをもっていました。そうも言っていられない状況となってきています。

理由の一つに、小学校の子どもは体型は袴に馴染まないということです。特に女の子は、8時30分から行われる全校児童参加の「卒業を祝う会」で、すでに着崩れで裾を引きずっている子がいます。見かねた職員や保護者の方が直しますが、かなりの数になり、式の前まで続きます。二つに、着付けに時間がかかるため、早くから起きて、10時から始まる式の途中で疲れが見えることです。三つに、これが一番の理由ですが、呼びかけや式歌の学習を積み重ねて迎えた当日、子どもの気持ちが装いに関心がいき、儀式に参加するという気持ちが薄れがちになることです。担任は、気持ちを立て直すのに苦労します。

学校だよりで、卒業式の「装い」について、何を伝えるか悩みました。すでに袴や美容院を予約していることも理解しています。キャンセルをお願いしているものではありません。現状をお伝えし、今後に向けて保護者の皆さんに考えていただきたいというのが私の願いです。